

『精霊の後継者』はダン  
ジョンで運命に出会う

仁611

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

異世界転生って基本順風満帆な滑り出しが多い中、主人公は決して恵まれてるとは言えない18年間を送る。

それでも挫けず、無力さを呪い直向きに生き抜いた彼と彼女の物語は甘さだけでも辛さだけでも無い、そんな物語の冒険者譚…

N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.
8	7	6	5	4	3	2	1
62	58	51	41	33	24	14	1

目次



## NO. 1

『神様転生』『異世界転生』『異世界憑依』

こんな言葉を並べた所で、俺がこの18年間送った人生は決してチートや主人公と呼べる物語では無かった。

山村に捨てられたまだ2歳にも満たない、自我すら持ち得ない幼児が俺だったのだが、自我が目覚めた翌日に育ての親が盗賊に襲われると言う悲劇に会い、村医者だった義父の日記で俺は出自が不明な子どもだと分かった。

義父が残した幼児の俺を、不憫に思った村の人達によって交代制保護者をして貰い育った。13歳を迎えた冬の事だったが、義父を殺害した盗賊により村人達の8割が殺された。

2割とは女と子供だ：

盗賊達が帆馬車で俺達をつれさる道中、偶然出会ったモンスターによって襲撃を受け

た事で俺達は当然逃げ惑った。俺がその時死ななかつたのは幼馴染のレインのお陰だ  
：

彼は村長の一人息子で心優しい勉強熱心な少年だった。彼の優しさは最早家族愛と呼べる程だったと今では思う、俺を庇って死に行く最中でも『逃げて！』そう言う彼の微笑みを今でも忘れない。

13歳にして実の両親は居らず、義父と故郷に友を失うなどこの時代では普通なのかもしれない。科学文明が発展し、世界的に見ても平和で満ち足りた人生を送って来た日本人だった者には耐え難い。

モンスターが去った後、亡骸の前で俺は友に向かって何度謝ったか分からない。自分の無力さ、無知で小さな存在だと悟った俺はがむしやらにその後を生きて行つた。

全ての亡骸から武器や金品を集めて街を目指し、待ち伏せ上等でゴブリン討伐しながらとある場所を目指し続ける旅路：

その後の5年も平坦では無かつたし、気付くと感じるようになったとある力を使い何とか生きて行つた。

14歳では戦闘能力を磨き、16歳から知識を磨き続けながらも世界の中心と呼ばれ

る街へひたすら向かったが、文明レベルが中世だった事も作用してかなり時間を使っ  
た。

俺が、ひたすら向かっていたその街は：

『迷宮都市オラリオ』

迷宮都市オラリオは別大陸でも有名な土地だった、世界で唯一のダンジョンを有する  
が故かもしれない。戦士に鍛冶師、商人に吟遊詩人など多くの者が目指す場所がオラリ  
オと言う大都市だ。

唯一、魔導師だけは魔法都市と言う二択を選択する者も多く居るが、名声を望む者や  
奪われた者達が向かうのはほぼオラリオだった。俺が向かう道中でも、多くの者が家族  
や親友など愛する者達を奪われてしまい、己の無力さを呪い嘆き悲しみ続ける者と奮い  
立つ者に分かれる：

中世の様な世界だからこそ、何も恨むのはモンスターだけでは無いし貴族や盗賊など  
を恨む者もいた。ガキだった俺に選べるだけの力は無く、狡猾で残忍にならなければ行  
けない時も多く存在した。

商隊に同行中に幾度となく盗賊に襲われ、全てを救うなど崇高で英雄的行いなど当然無理だった事も何度もある。そんな俺だからなのかは分からないが力を欲する気持ちが日増しに増えて行く、そんなある日に不思議な夢を見た。

小さな光に導かれ、妖精の様な姿の光に『全ては貴方次第です』そう言われ自身の内に存在する不思議な力を自覚した。当時は17歳を迎えており、この世界では一応成人扱いされようやくオラリオを目と鼻の先に捉えていた頃だった。

そして冒頭に戻り、あれから8ヶ月程でレベル2を達成したレコードフォルダーとして、アテナファミリア唯一の団員として日々稼ぎにダンジョンへと向かっていた。

アテナとの出会いは、下界に降りたばかりのアテナと都市に着いたばかりの俺が互いに迷子になったのがキツカケだった。道を聞こうと互いに話し掛けた事で、相手が神でその相手が冒険者志望だったと言う偶然からファミリアを結成することとなった。

未だに団員が居ないのには当然理由があるし、アテナ自身も特段急いで団員を募集する迄では無いと思っっているからだ。理由自体は俺のアピリテイにあるのだが、内容的に仕方ないとも言える。



ルーメン・リフレイン 半精霊

L v. 2

力：B710

耐：A880

器：B787

俊：SSS1589

魔：SSS2800

神格：C

神秘：G

### 《魔法》

#### 【元素精霊術】

※光大精霊の加護により、光精霊の全ての魔法が使用可能だが器に比例して使用権を拡張。使用可能な術は本人のみ理解する

### 《スキル》

#### 【光精霊因子<sup>ルシフェル</sup>】

※精霊因子を持ち、精霊術と魂の強度を昇華させる。魂の昇華は繰り返し事で相乗効果を生む。

・魔法耐性が強補正されるがアビリティに反映しない

・魂の昇華に対して経験値を乗算する（転生1精霊1昇華1）

・精霊術の使用権（魂の器に応じて権限拡張）

【@?&/!?!】

@

@

アテナ曰く、この世界には精霊の血によって加護を受けた『クロツゾ一族』の様な者も居るらしいが、俺ははっきり言って異質で特別な存在らしい…

精霊は神が生み出した半神と言っても良いのだが、人と子を成せないし自分で子孫を残せない筈らしい。だが俺に至っては人でも精霊でも無い半端者な上神でも無いと言

う。  
異世界転生者だからなのか、はっきり言ってこの世界のルールに則った判断が出来ない  
いとアテナは言っていた。

魔力が高いのは、生きてるだけで俺は魔力循環を常に行っているらしく、力を得てか

らは常に微弱な成長をし続けている。俊敏に関して自身を精霊寄りに一時変化すると、まさに光速移動が可能だから成長速度が速い。

こんな爆弾ファミリアに安易に団員勧誘は出来ず、アテナ自身も俺が居れば生活に困らないと言って勧誘自体していない。稼ぎ自体は1日中ダンジョンアタックすれば50万ヴァリスを一人で稼ぐ異常性も兼ね備えると言う有様だ。

そんな俺だが1つ、半精霊として悩みが存在する…

半精霊？ぼい相手が直感的に分かってしまうのだが、ロキファミリアに所属する【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインにそれを感じてからは極力関わらない様になっている。

クロツゾの子孫は加護持ちなだけだが、ヴァレンシユタインはちよつと違う感じがする。初めて会ったのはギルドの本部である【万神殿】バンテオンですれ違った時に感じたが、彼女は特に俺を気にしていないかったけど今後も同じとは限らない。

だからこそ彼女をひたすら避けていたのだが、最近とある事がキツカケで追い掛け

れている。

元々彼女のレベルアップレコードを更新した時から目を付けられ、偶然下層へ向かうダンジョンで彼女を追い抜いた事がキツカケで追われている。

その時は光速移動をしながらだった事と下層域で冒険者に遭遇し難いからと、余り周りの冒険者を気にせず27階層を疾走していた。レベル5の彼女を追い抜く、こんな事が出来る冒険者などほんの一握りな上に、楽勝で追い抜いた事が彼女の琴線に触れた。

初めて彼女に話し掛けられた言葉もかなり独特で、アイズ語などとアテナと話す程斜め上な言動だった。『あの時の、不思議な風の人?』などと、話し掛けて来た本人が疑問形で来た：

その時はどうにか言い逃れしたが、俺のシルバーブロンドポニーテイルにした髪型に金色の宝石眼、かなりの軽装な上に扱う武器が極東人が使う刀と言う出で立ちだったのが災いした。

二度目の邂逅時もダンジョンだったが、光速移動中に風を読み俺の鞆に彼女の鞆を当てて来た。この出来事で彼女は俺の背格好を纏う風と刀装備の冒険者だと断定し、俺を見つけては話し掛けるのが日常になった：

「【<sup>ルシフェル</sup>聖騎士】さん？あの時の風の人、だよ？」

「ん？」

「どうしたの？アイズが他の派閥の冒険者に話し掛けるとか珍しい」

「確かに珍しい事もあるのね」

そこに居たのは【大切断】ティオナ・ヒリユテ【怒蛇】ティオネ・ヒリユテと、お馴染み【劍姫】アイズ・ヴァレンシユタインの3人組だった。

因みに【聖騎士】とは俺の二つ名だが、【性騎士】<sup>真っ白しろすけ</sup>【白き者】などふざけた二つ名も候補にあったが、アテナのひと睨みと言う暴力で黙らせ【聖騎士】となった。

アテナ曰く、<sup>パトルクロス</sup>白い戦闘服に礼儀正しい人格に対して付けられたとか、因みにルシフェルとは光を纏う者と言う意味だとかそうで無いとか…

「俺に何か用ですか？二つ名はそこまで好きじゃないので名乗っておきますね…ルーメン・リフレインつて言います。好きに呼んで下さいね」

「アイズ・ヴァレンシユタイン。アイズで良い、ルーメン…さんはどうしてそんなに早く強くなれるの？」

「あつそれ私もきになる〜」

「そうね」

「俺がですか？うーん……生きてきた知恵や技術を、レベルアップに合わせてなぞって居るだけですよ？」

俺が言った事は本当だし、半精霊と言う事を加味しなければこう言う回答になるのは仕方ない。前世における生物学や運動力学、化学における知識も狩に活用している。

アビリティに関しては科学文明の発達した元日本人らしく、ゲームキャラの育成の様に研究してそれらを実行している。この辺りはこの世界の住人には発想すら無いだろう検証をしてきた…

「一緒にダンジョン、付いて行って良い？」

「アイズ!」

「それは流石に、他派閥って事でダメなのでは？」

「そっか……」

ヴァレンシユタインはしよぼくれてしまい、俺が虐めてる様な気さえしてしまい居た堪れない。どうにかこの空気を打開すべくヒリユテ姉妹へと視線を送る。

「ねえ！アイズ？フィンに相談したら良いんじゃないかな？」

「うん！頑張る……来て」

「あつアイズ！彼をどうするのよ」

「行っちゃったね…あははは」

「行っちゃったねじゃ無いわよ…追いかけるわよ、このままでは団長に迷惑が掛かる

じゃ無い」

「あははは。【ルシフェル聖騎士】君は良いんだね」

「そこを悩むのはアイズの仕事よ」

「あれ〜結構正論だ！」

そうして俺は……

誘拐された先は簡単に予想出来る場所、【黄昏の館】最大手ロキファミアのホームである城の様な建物の【勇者】フィン・ディムナの執務室にいる。

アイズ・ヴァレンシユタインの奇行によって連れて来られたが、いくら俺が特殊なア

ビリティとは言え、純粋なレベル5の腕力には敵わない為仕方ないのだ。

目の前には、こめかみにシワを寄せる【九魔姫】リヴェリア・リヨス・アールヴに、顎に手を当て考え込む【勇者】フィン・デームナが立っている…

「なあアイズ…話は分かったが、彼を何故強引に連れて来た？」

「ごめんささい」

俺は目の前で繰り広げられる、母親に叱られる娘の図をどう見てれば良いのだろうか？アイズ・ヴァレンシユタインは【黄昏の館】に着くと、門番をガン無視して俺を【勇者】<sup>プレイバ</sup>の執務室へ連れて来ると、言い放った言葉は正に『は？』の一言に尽きる。

「フィン、ルーメンさんと一緒に居たい」

「え!？」

その後の展開だが、【勇者】に眉間がピクピクしながら表情筋がこわばるのが見て取れるさなか、副団長である【九魔姫】リヴェリア・リヨス・アールヴが団員の報告を受けて団長の執務室へとやって来た。



先程の言葉の真意はこうだ『ルーメンさんの強さを知る為に、一緒に行動する事を許して欲しい』と言う内容だ。先程迄は、碌に互いを知らないのに両親への結婚の挨拶をさせられる心境だった：

結局俺自身も決めかねる内容な為、一度持ち帰り主神へ報告して翌日の1時にアテナと来る旨を伝え解放された。不覚にも怒られてしよげてる【剣姫】を可愛らしく思ってしまったが、それは仕方ない…：

「と言う事があったんだけど、どうしようかアテナ？」

「そうね〜ウ私達のファミリアは零細も零細だから、いつその事半精霊ばいアイズちやんもいるのだから守って貰う？同盟と言う形でね」

「まあ、【剣姫】が精霊の加護とか何かしらの話は聞いたこと無いって考えると、ロキファミリアも【剣姫】のそれは秘匿情報なんだろうが、大丈夫なのか？ロキと言えば『天界の狡知神』トリックスターと言われた神なんだよな？」

「大丈夫でしょうね。昔とは大違いだもの、眷属子供への愛情を感じる振る舞いだもの」

「アテナがそう言うなら俺は構わないよ。知略・策略に関してアテナの右に出る者など居ないからね」

## NO. 2

—翌朝—

普段通り朝日より前に起き、一般的な冒険者達が鍛錬と呼ぶ地獄の様な強化練を行う。他の冒険者達が気付かないのが不思議だが、素振りや体術練は本気で動かなければ器用値以外上がらない。

全力で筋肉を瞬発的に動かし可動域の難しい動きを繰り返す、器く俊く力が伸びる訓練法として編み出した。次は外壁を動かす気で全力で押し続ける事で筋肉に負荷を掛けると力く耐が伸びる。

次に行うのが立体機動と言う俊く器が伸びる全力障害物競争だ：最後に行うのが体力1割以下でのスローモーション形稽古、模範とも呼べる動作を1時間以上掛けて行う事で器く耐く見えない体力が伸びる。

全てを終えたら瞑想を実行する事で精神と集中力を鍛えるのだ：

普段ならその後ダンジョンへと向かう支度をするが、今日はロキファミアリアに行かな

くてはならない。朝練をここまで厳しくする事でダンジョンでは常に限界を更新し続ける事になる、今日だけは夕練をかなりハードにしないとイケないだろう。

「それじゃあ行くわよルーメン」

「何でそんなに気合が入ってるんだ？」

「天界のセクハラ魔神と呼ばれたロキに会うのよ！危険地帯にわざわざ踏み込むのだから仕方ないわよ」

「俺もアテナを守るから安心してくれ」

「頼もしいわね！」

【黄昏の館】へ着いた俺達は、【超凡夫<sup>ハイノーマリス</sup>】事ラウル・ノールドに案内され敵地へと踏み込んで行った。案内されたのは昨日とは違いかなり広々とした応接室だった。

促される様に扉を進むと、挨拶もしない内から神ロキっぽい女性がアテナ目掛けて飛び込んで来た。俺は闘牛士の如くアテナを左側から右側に回転する要領で位置を変えたのだが、結果として神ロキはターゲットを失い地面に顔を強打する事となった。

挨拶は謝罪から始まるという締まりのない幕開けとなった…

「本当に申し訳ない。神アテナ、それに連日申し訳ないね―【聖騎士】《ルシフェル》君改めて名乗らせて貰うよ、ロキファミリア団長を務めるフィン・ディムナだ」

「良いのよ…ロキはその辺りは天界の頃からだもの、一応私も自己紹介しようかしら？ 戦略と知恵、それに芸術などを司る三大処女神と言われているアテナよ」

「俺はお気遣いなく。アテナから事前に神ロキに関しては何つていましたから、俺も一応自己紹介させて貰います。アテナファミリア唯一の眷属ルーメン・リフレインです」

「では私も名乗らせて貰おう。ロキファミリア副団長を務めるリヴェリア・リヨス・アールヴだ…アイズの件も含めて申し訳ない」

「それじゃあ儂の番かの？ 2人と同じロキファミリア最古参の眷属でもあるガレス・ガンドロックじゃ」

「順番的に私かしら？ 私はそこにいるティオナの双子の姉で、ティオネ・フリユテよ…」  
「じゃあ私だね〜ルーメン君！ 昨日振りだね〜ティオナ・フリユテだよ〜宜しくね〜」

「えつと…アイズ・ヴァレンシユタイン、です」

「あら？ 貴女がアイズちゃんね、本当に可愛らしい子ね」

「うちのこと忘れてるやん！」

「それで今回はアイズちゃんがルーメンと一緒にダンジョンに潜る事に対してだったか

しらっ？」

「うっちは〜」

「うるさいわねロキ」

「グスン…アイズたくんアテナがうちを虐めて来る〜」

「自業自得」

「グヘツ!？」

話し合いは神ロキをガン無視して進む中、表面上はさほど重大では無いような問題だが、アイズ・ヴァレンシユタインと俺は他派閥な上に同盟派閥では無い、ダンジョンに潜ると言う事は個人のアビリティが多少なり露見する事もある。

ファミリア間の暗黙のルールとも言えるステイタスの内容や、異性間の交流は意外と繊細な話題なのだ。ロキファミリア側がルーメンの半精霊と言う内容を知ってるかは分からないが、アイズちゃんとの共通点が多い事から特別感が好意に変わる事もあり得る…

《二派閥同盟規約》

これらは、署名された瞬間から神の名の下に盟約は結ばれるものとする。下記に記載された内容を違反した場合、下界で持ち得る全ての財産（人材・財産・知識）を無条件に相手派閥に譲渡する。

1つ、互いの不利益になる行為の禁止

※陰謀や敵対、神威を使用しての命令など

1つ、互いを家族ファミリーの様に扱う事

1つ、情報の共有と秘密保持

※個人ステータスのみ互いの神同士で閲覧を審議する

1つ、恋愛や交友の自由

※子供を出産した場合、その子の自由意志で所属を決める

1つ、財産は互いに不干渉とし、融通する範囲は派閥の团长権限とす

1つ、喧嘩や痴情のもつれなどの場合、派閥ルールに則り裁く

※喧嘩は過失と経緯・痴情の場合も同じく2神によって裁く

上記の内容に派閥同士で不足や変更があつた場合、両团长・2神での内容の改定会議を行い実行出来るものとする。魅了や薬などで相手の判断能力を誘導して盟約を変更、又は侵害した場合は厳罰に処する

盟約が結ばれる話までかなりの問答があつた、神ロキの眷属達は本神の趣向によつて美女・美少女が多く在籍するから当然とも言える。アテナによるとある一言で神ロキは署名する事を決めた…

『<sup>親</sup>神が<sup>子供</sup>眷属の<sup>幸せ</sup>人生を決めてはならない』

正にその通りだと俺は思ったし、天界時代の神ロキと違い今のロキは眷属<sup>子供</sup>想いな神だ。とこの時敬う気持ちが湧いた。恐らくロキファミリアの面々も普段の神ロキと違い威厳や敬いの気持ちを抱いている事がうかがえる顔をしていた。

そして、アテナの提案によつて俺の素性とステイタスを幹部とロキだけに開示することを決めた。結果として、アイズ・ヴァレンシユタインの件が絡んで来るのでテイオナとテイオネが席を外す事になった。

「それにしてもや、アテナの子のルーメンが半精霊言うんは正直驚いたけど…異世界転

生者言うんはマジモンの爆弾やで」

「そうね…でも、その問題は普通に誰も気付かないと思うわよ?」

「確かに神アテナの言う様に予想すらないと僕も思うよ」

「フィンの言う通りだな。だが、今後もこの情報は限られた者のみで共有する方が良いだろう」

「まあ儂からしたらアイズに関わる内容以外はどうでも良いからの」

大方の話し合いが済むと、ファミリアとして今後どの様な変化が起きるか予測出来ない部分が多いので、定期的にアテナファミリアとロキファミリアで盟約会議を行って行く事を決めた。

終始アイズが精霊と言う単語や、精霊関連の情報に敏感に反応している事から、リヴェリアの提案によってアイズのダンジョン同行の件はロキの愚痴を無視して可決された。

これが、アテナファミリアの未来に訪れる『光星の英雄譚』と呼ばれる物語の始まりだったと言える。ルーメン・リフレイン創世記から始めて『神』と言う二つ名を授かった冒険者の話しだ。



その日の夕食時、ロキファミアではアテナファミアとの盟約を発表したが、どこぞの【凶狼】ベート・ローガの「雑魚と盟約何て意味ねえだろうが」と言う言葉から、神ロキからとある提案が翌朝提示されたのだった。

向かい合う【聖騎士】ルーメン・リフレインと【凶狼】ベート・ローガの模擬戦、この模擬戦のせいでアイズは不満げな顔をしている。アイズ自身がルーメンと闘いたかったが、ロキは結果を予想しているからなのかベートを名指しして模擬戦を提案した。

「おい！雑魚の分際で調子に乗るんじゃないぞ」

「やる前から随分な事を言うんだな？」

「当たり前だろうが！強え奴が勝つのが当たり前だろうが」

「それなら結果は自ずと見えて来るな」

「二人共、準備は良いかい？当然相手が死ぬような攻撃は禁止だ」

「ああ（良いですよ）」

「では、始め！」

俺は速攻で光速移動を行い、接近しようと向かうベート・ローガの顎を真横に出現し

て全力で殴る。彼等冒険者達は人体の構造などに詳しくない為、殆ど知らないだろうが故の油断と慢心。

レベル5が相手だからこそその全力打撃によつて脳が揺れるが、反対側に再度出現して追い討ちの様に更に脳を揺らす。ベート・ローガは精神力だけでどうにか立っているが、片手を膝につき頭を抱えフラフラ状態で耐えている。

神ロキもロキファミリアの団員達に慢心をする眷属眷属が居る事を分かつていたのだろう。何も読み取れない表情をして目を細めて居るのが視界に入った。

神の意志ならと、俺は全力首トンを実行してこの模擬戦を早々に終わらせる事にした。多分だが、ベート・ローガもこの模擬戦の意味を知っている節があったが、敢えて自分の信念に従つて俺との模擬戦を実行したのだろう…

気絶する間に「クソ野郎」と言う悪態を最後に意識を失う…

先程までロキファミリアの団員達には、ベート・ローガが負けるなど微塵も思っていなかったのだろう、幹部達と数名以外は驚愕と畏怖の念を俺に向けて来た。

俺は、ベート・ローガに敬意を持って気絶する本人を抱えフィンとロキの側へと連れて行つた。神ロキは表情こそ変えないが、拳を強く握る姿が一瞬目に留まつたが、敢え

てそこには触れずベート・ローガへの伝言を頼んだ。

「是非また、模擬戦をしたい。そう彼に伝えて下さい」

「ああ。僕が必ず伝えるよ」

「ホンマ、おおきにな」

「いえ、彼の献身は尊敬に値します」

俺の発言を理解してない団員達は騒然とし、幹部達は敢えて説明をしない事を決めたのだろう。この言葉の意味を考えるようにフィンが命じて解散とした。

その後、昼からはフィン・リヴェリア・アイズ・ティオナ・ティオネ・レフィーヤと共にダンジョンへと向かう事となり、一旦解散してバベル前の広場集合となった。

## NO. 3

精霊には風・土・火・水・光（闇）と言われている：

闇精霊のみ何処の神が創造したか分かっておらず、とある一説が一部の神々で囁かれている。精霊術を紐解くと、意外な面が見え隠れしている事が伝説にも綴られている。

風…空気そのものを指す

火…熱そのものを指す

水…液体から固体へと変化そのものを指す

土…大地そのものを指す

光…闇と始まりそのものを指す

複雑怪奇で摩訶不思議な内容で、神々ですら司る分野以外は干渉出来ない内容だった為、未解明な分野となっている。神とは全知全能などでは無く、専門分野のプロフェッショナルで器が只々大きい子供であると、歴史の異端者でもある科学的思想の学者が

言ったとか言って無いとか：

俺が転生した世界は、神が下界して来た世界の割には余りにも未成熟で未知が多過ぎる。ハッキリ言い切れる事があるなら、ダンジョンを殆ど知らない神など全知全能な訳が無いと証明してる気がする。

何故こんな話をしてるかと言えば、ロキファミア幹部と一緒にダンジョンアタックしている途中ある質問をリヴェリアにしたからだ。ロキファミアの団員はどの程度ダンジョンを理解してるのかと：

返って来た内容は、とても大手派閥の未知を探求する組織とは言い難く、何も知らないと言って良い内容だった。『モンスターが産まれる場所で未知がそこにある』馬鹿なのか？そう思ってしまうのは仕方ないだろうな。

普通、ダンジョンの壁面が修復するのは何故？どうしてダンジョンが産まれたのか？ダンジョンの特質を調べようとするものだと俺しか思わないのがおかしい：

探索中に俺は疑問をひたすらフィンとリヴェリアに問いかけ続け、彼等に「何故そんな質問をするのか？」そう聞かれて逆に何故気にならないのか聞きたくなかった。

Q. 冒険者の死後、武具がダンジョンに吸収されるのか？

A. されない

Q. 階層を破壊し過ぎた場合どうなるのか？

A. 破壊し過ぎると魔石の無いモンスターが出現するらしい

※アストレアファミアの壊滅理由だとか

Q. 強化種の発生条件は分かる？

A. 運によって魔石を食らう種が発生

これ以外にもかなり細かい事を聞いたが、何も分からないと言うのが結論だった。仕方なく、俺自身で調査することにしたのだが『俺自身が調べるか』と言う独り言にアイズが『手伝う』などと言う意外な発言をして来た。

アイズ曰く、疑問は多く抱いていたらしいけれど賢く無い自分では疑問点を上げて人に伝える事が出来なかったらしい：本気で意外だと思ってしまうた。

「なあアイズさん？」

「アイズで良い」

「じゃあ改めて、アイズ？探索と一緒に調査する時間が必要だけど協力してもらえるか？」

「うん、それが良い事な気がする」

この直感が大きく、ダンジョンや星の運命を動かし、人々と絡み合う陰謀や使命などが変化し始めた。始めた行為はかなり程度が知れた事だったけれど、壁を切り取った場所に金属製のコップをはめ込んだらどの様に修復するのか。

18階層と19階層の接続した通路で施し、下層へ向かって皆とアタックして行った。ここで余談だが、俺の反射速度や動体視力が化け物じみてるらしいが、インパルス：脳内の電気信号の速度も光速化をしてるようだ。

27階層に出現する階層主、アンフィス・バエナをロキファミアリアの面々と狩ったり、宝石樹ハイポーションに高等回復薬の材料となる薬草や魔力伝導体とも言えるミスリルを回収し、帰路へと着く事となった。

調査で行ったコップの件も、数時間もの間放置した結果コップは吸収されずにはまらなかったまま周囲だけが直っていた。人工的な生産物が吸収されない可能性が、次回は革製品がどうなるかも調べようとアイズと話していた。

これらの事実からフィンとリヴェリアも非常に興味を示し、ファミアリアを上げて多くの調査の協力をしてくれる事となった。

「ねえ…ルーメン、貴方は両親に会いたい？」

「…どうだろうな。会った事無いから分からないな、育ての親や家族と言える村の人は全員死んだから」

「ごめん、なさい」

「いいや…アイズは会いたいんだろ？俺にとつてそうでもアイズにとつては掛け替えの無い存在なんだ、協力は惜しまないよ」

「ありがとう…ルーメンに会えて、良かった…：私一人じゃきつと、ただ戦う事しか…出来ない、から」

「アイズ…ただ戦うつて言うのは凄く苦しく辛い事だ。それは凄い事だから、それに君は独りじゃ無いだろう？<sup>ファミリア</sup>家族がいるし、これからは俺と一緒に考えるからな？」

「そう、だね。ありがとう」

「二人共、まだダンジョンなのだから気を付けるんだ」

「ええ、分かりました」

「うん、分かったフィン」

アイズは両親の行方不明で独りになり、俺は盗賊達によつて全てを失つた…俺には前世での生きた月日が存在した事で、理不尽なりにどうにか折り合いを付けられた。



アイズは本当に子供だった時に、母に父と言う世界の全てを失った事で絶望し、憎悪をモンスターへ向ける事で壊れずにいられた。成長していても、彼女の心は憎悪が足枷となつて歩みを遅らせているのだと感じた。

お兄さんが君の背中を押そう：

俺自身がホームへ辿り着いたのは、夕日が地平線へと沈み切った辺りだったが、アテナは夕餉ゆうげの支度を済ませて俺を待つて居てくれていた。アテナを母の様には感じられないが、姉（仮）としてならかうじて思えるぐらいには繰り返した日常。

今度こそ、家族を失う事が無いように守る力を手に入れよう：

食事を済ませ、アテナの執務室へと足を運んでステイタスの更新をお願いした。何故かいつもより長い更新を不審に思い、アテナにまだなのかと問いかけると「ごめんなさい、終わりよ」そう言つて背中から降りた。

ルーメン・リフレイン 半精霊

L v. 2 > " u p "

力 : B 7 1 0 > A 8 8 0

耐 : A 8 8 0 > S 9 1 5

器 : B 7 8 7 > S 9 7 6

俊 : S S S 1 5 8 9 > S S S 1 7 7 7

魔 : S S S 2 8 0 0 > E x 3 7 9 5

神格 : C > B

神秘 : G

### 《魔法》

#### 【元素精霊術】

※光大精霊の加護により、光精霊の全ての魔法が使用可能だが器に比例して使用権を拡張。使用可能な術は本人のみ理解する

### 《スキル》

#### 【光精霊因子】

※精霊因子を持ち、精霊術と魂の強度を昇華させる。魂の昇華は繰り返す事で相乗効

果を生む。

- ・魔法耐性が強補正されるがアビリティに反映しない
- ・魂の昇華に対して経験値を乗算する（転生Ⅰ精霊Ⅰ昇華Ⅰ）
- ・精霊術の使用権（魂の器に応じて権限拡張）

【<sup>リフレイン</sup>護り精霊】

- ・自動回復の加護
- ・対象は本人が心の底から望む者のみ
- ・思いの丈で効果は上昇
- ・自分には掛けられない
- ・神アテナ常時発動

これは確かに戸惑うな、文字化けしてたスキルの部分なんてアテナが大切だって言ってる様なものだし、正直恥ずかしいのは俺だ。アテナがモジモジするのは辞めて欲しい

：

「悪いけど、レベルアップ処理お願い出来る？」

「あっうん。分かったわ」

そうだった、彼女は処女神が故にこう言った場面への耐性が雑魚過ぎる事を忘れてた。若干震える指先で更新を行うアテナを、思考の片隅に追いやり考えない様にするため、何も無かったかの様に発展アピリテイを選択した。

発展アピリテイ剣聖、何故かは知らないがI<sup>アイ</sup>からでは無く初めからGだったのは分からないけれど、俺のステイタスは元々良く分からないモノだから気にしても仕方ないかな。

「ありがとうアテナ。今日は少し疲れたから、俺はもう寝るよ」  
「う、うん。お休みなさい」

俺が扉を閉めるとき、彼女の顔が一気に赤面して行ったが見なかつた事にして静かに閉め切った。それから1ヶ月ぐらいはアテナがモジモジしてたけど、俺が至って普通だったからか彼女も次第に平常運転へと戻って行った。

この時はまだ、墮女神の化身へステイアと出会う少し前で、彼女と関わる事で少しずつ変な運命へと巻き込まれるとは知らなかつた。オラリオで後に、正式な二つ名とは別に【ルーメンの兎】などと言われる存在が訪れるほんの少し前だった。

## NO. 4

## 《ダンジョン調査》

・ダンジョン各階層の正確な大きさ

※ボウガンを使い各階層を測量

※正確な模型を作成して、地上との位置関係を明確化

・ダンジョン破壊の再生速度計測

※各階層ポイントを割り振り計測

結果：下の階層の方が早く、それらがモンスターの出現速度に関係すると予想出来る。

・ダンジョンの強度と耐熱耐性

※数学的進歩が未成熟な為、地球の数学を使用

結果：下の階層の方が高く、それらが鉱物資源の出土比率に反映されていると分かった。

・ひと階層事の『怪物の宴』出現率調査

※ロキファミアの団員達に遭遇階層と時間を記録して貰った。

結果：探索パーティーの強さと階層の低さで大きく変化、階層に対して弱い程出現しており下に行く程回数が増えて行く。

※神々では常識な『ダンジョンが神を恨む』を体现している

e t c . . .

これらの調査以外にも、精霊の気配を感じる為色々アイズと調べに行ったりしていたが、確信を得られる程精霊関係は発展していない。そうこうしている内に、モンスターファイリア「怪物祭」の時期が近付いて来ていた。

そんなある日、アテナが徐々に神へファイストスと食事に行くと言う事で同席する事になったのだが、衝撃的な場面に出会う事になったのであった。

「ハスティア！いい加減にしなさい。もう我慢の限界よ、これ以上貴女の怠惰な生活の為に眷属達子供が頑張つて稼いだお金を使うわけには行かないわ：最後の情けで住む場所を用意してあげるから自分で働いて生活しなさい」

「そんなくへフアイストスく心を入れ替えて頑張るから僕を追い出さないでおくれ？」  
「いいえ。それが出来るなら寧ろ私の元を離れるべきだわ」

「そうね」

「ん！アテナ?!」

「久し振りね、二人共」

「アテナ？俺はこの話しを聞いてて良いのか？」

「良いわ（のよ）！墮女神に尊厳など必要ない（のよ）でしょ」

「へフアイストス、アテナ：墮女神何て酷いよ」

「へフアイストスが言ってた通りよ、ヘステイアの生活がどんなだったか知らないけれど、へフアイストスがこんな怒るだなんて相当怠惰な生活を送っていた事くらい分かるわよ。眷属<sup>子供</sup>達の努力をそんな墮女神に使うだなんてあり得ないわよ」

「えくと、眷属<sup>子供</sup>代表として言わせて貰って良いですか？天界の仕事もしない、だからと言つて下界でも生産的な事をしないなど存在の浪費、生命と世界への冒涇とでも言いましょうか」

「グヘツ」

「トドメー！」

阿鼻叫喚な現場だったが、どうやら神ヘステイアも一応ファミリアを結成して家族が欲しいと言う気持ちは本物だったらしく、ヘファイストスの紹介でジャガ丸くんの屋台でバイトをする事となって、新しい居住地へと我々も付いて行く事となった。

どうやらかなり外観は廃墟だが、地下の居住地可能スペースのライフラインは整備されておき、ヘファイストスは少し前から堪忍袋は限界だったみたいだ。

最初は呆然自失だった神ヘステイアも、アテナも多少は手助け（金銭以外）をしようと  
言う言葉に救われたらしい。神ヘファイストスにも頑張っている姿を次は見せなさい  
と言ってバベルへと帰って行つた。

残された我々は若干可愛そうになつた為、俺が助け舟を差し伸べる提案をした。ジャガ丸くんデリバリーヶ月と言うバイトを俺が提案して、その対価として不足の家具や  
魔石製品を購入してあげる事に…

「ルーメンは甘やかし過ぎよ」

「ルーメン君くあゝりかゝとゝう」

「いえいえ…神への慈悲ですよ」

「意外と辛辣ね」



結果、現状中古ベット1・中古ソファ1の所を新品シート・新品枕・新品ソファ・カバー・中古ダイニングテーブル・食器4人分・部屋間仕切り用パーテーション・中古魔石洗濯機を買ってあげた。

ベットの追加は、このままでは団員募集など夢だろうと思つての慈悲だったのだ。ついでとばかりに外観部分の屋根を手作業で補修と、見た目のカモフラージュ様に防水加工布を掛けて、募集団員の外観での逃走を緩和させる措置をしてあげた。

この行いが影響したのかは「神のみぞ知る」のだろうか？

それから2週間程経った頃、いつもの様に朝練を外壁上部で行なっていた時、日が昇り初めて丁度朝食の頃合いだったのだが、偶然見かけた街への入街審査を待つ一向に兎のような少年を見かけたのだが少し感じるものがあつた…

その時は気にしない様にしていたが、ホームに戻つて朝食後街で用事を済ませる際にやたらとその少年に出くわすのだ。某商業ファミリアだったり中規模ファミリア前だったり、見かける姿は全て入団を門前払いされる姿だった。

流石に可愛そうになつて来たが、俺のファミリアでは彼の様に嘘が下手そうな彼では入団させられない。しかしどうしたものかと考えていたら、ジャガ丸くんを売る小さな

墮女神を思い出した。

「なあ、君？冒険者志望か？」

「へっ!? あっはい！」

「俺の所属ファミリアじゃなく、まだ誰も居ないファミリアでも大丈夫なら紹介出来るがどうする？主神は女神様で優しさと情の深さだけなら多分オラリオでも上位の神だと思う」

「えつと…正直凄く嬉しいです！だけど僕なんか…受け入れられますか？」

「は、冒険者の資質に見た目など関係ない、他のファミリアでどんな言葉を受けたかは知らないが、そんな物ははつきり言つて何の足しにもならない戯言だ。君が何を思つて冒険者になるか知らないが、その想いを絶やす事なく貫く事の方がよっぽど重要だ、それにあの女神はそんな些細な事を気になどしないだろう」

目の前の白髪で紅眼の少年は「キラキラ」した瞳で俺の言葉を聞いていたのだが、我に返つたのか自己紹介もまだな事に気が付きお礼と自己紹介を始めた。

「あの一！ありがとうございます。自己紹介もまだでしたね…ベル、ベル・クラネルです。紹介の件、宜しく願います」

「ああ、清々しい程真っ直ぐだな。俺はアテナファミリア団長で二つ名は【聖騎士<sup>ルシフェル</sup>】と呼ばれてる、名はルーメン・リフレインだ。紹介するのは良いが今はバイト中だろうから俺のホームで待とうか？バイト終わりにジャガ丸くんを届けにやって来る筈だ」

「えっと、ジャガ丸くんですか？」

「ああ、待ってれば分かる」

そうして出会った彼、後に【ルーメンの兎】と無駄に注目される事になるベル・クラネルとの出会いだった。

一先ずベルをアテナファミリアへと連れ帰り、アテナにも紹介して色々とベルの話しを聞いていた。ベルがオラリオへやって来たのもお爺さんが亡くなってしまい、亡くなる前に言っていた『覚悟があるならオラリオへ行け』と言う言葉を胸にやって来たらしい。

「それにしてもベル、『出会いを求めてダンジョンでハーレム』などと言う言葉を吐いた

人間とは思えないギャップだな」

「ベル：貴方どこか発言が私の知ってるエロ爺にそっくりね」

「えつと：あはは。お爺ちゃんには色んな心得を教わったんです。『男に生まれたからにはハーレムを』とか『女を守って侍らすのが男の甲斐性』だとか、他にも：」

「ベル。もう良いぞ、マジで」

俺とアテナが頭に手を当て、ベルの語るお爺さんから聞かされた英雄譚迄は良かったが、女関係のかなり偏った教育に溜息が&を繰り返してしまう。そうこうしていると、扉を叩く音と神へステイアの間延びした挨拶が聞こえて来た。

「おっ！アテナ！ルーメンくん！お届けに上がったよ」

「おっ！やつと来たか。少し席を外すがすぐ戻る」

「ええ、私はお茶を用意するわね」

## NO. 5

「熱々のジャガ丸くんを届けに来たよ！」

「ああ、ありがとうへスティア」

俺が神へスティアを呼び捨てにする様になつたのも数日前の事だつたのだが『ルーメン君には敬称を付けて欲しく無い』『敬語も不要だ』『君がアテナの子で無ければ僕は心底惚れてたよ』などと言う言葉からこうなつたのだ。

「さあ上がつて欲しい、今日はへスティアに良い話がある」

「へ？何だい、良い話してのは」

「奥で話すよ。それと、アイズにも小倉クリーム味を届けてくれたのか？」

「ああ！バッチリさ」

「いつもありがとう」

「それは僕の言葉さ、君のお陰でホームは快適なんだからさ」

「そうか。さあ、ベル…彼女が女神へスティアだ」

そこからは、ガチガチに緊張したベルの自己紹介から始まり、ヘステイアの感謝のハグをアテナの脳天チヨップで終わるまでかなりバタバタしてしまった。

「ヘステイア……ルーメンは私の眷属子供よ！いくら貴女でも彼への過度なスキンシップはダメよ」

「あはは……えつとルーメンさん、アテナ様つて怒ると怖いんですね」

「そう言う事は言わない方が良いぞ」

「ベル!?!」

「はっはい！何でしょうかアテナ様」

「……」

「えつとき、アテナ。一先ず落ち着いてくれないかい？ベル君も困ってるみたいだし、るっルーメン君からも何か言っておくれ」

「アテナ？ベルには悪気が無いんだ、まだまだ純真なんだから女神として甲斐性を見せるべきだ」

「オホンッ！それもそうね。ごめんなさいベル、それと話しを進めるわね」

漸くベルをヘスティアの眷属にどうかと言う話が進み、そこでとある事実が露呈したのだった。ロキファミアでも門前払いを受けた、その事実を聞きヘスティアは激おこブンブン丸になってしまった。

「何だいそれは！ロキの所では人を見た目で判断する様な教育が成されてる何て、信じられないよ僕は」

「おかしいな…ロキファミアでは種族に性別、体格や容姿関係なく入団試験を受けられる方針だと聞いている」

「そうね。私もそう聞いているわ」

「どちらにしたって、ベル君は門前払いを受けたのは事実だ！」

「俺から苦情を言っておくから、ヘスティアも落ち着いてくれ」

ベルが、ヘスティアと俺達の遣り取りを見てアタフタしてしまっていたがどうか落ち着いた事に溜息を漏らしていた。ヘスティアとベルは性格的にも相性が良い様で、帰る頃には打ち解け仲良くヘスティアファミアへと帰って行った。

俺は今、ロキファミアの遠征組と深層に来ていた…。

理由なんて直ぐ分かる様な理由で、俺のオラリオ外での豊富な経験だったり同盟派閥として参加する事になっていた。遠征参加基準のレベル3以上と言う水準も超えており、総アビリティ値で言えばレベル6相当なのだから俺は優良株だろう。

現在はロキファミアが受けている『カドモスの泉水採取』を先に終わらせる為にと、少数精鋭で51階層の『カドモスの泉』へと向かうメンバーを選び中だ。

A：フィン・ガレス・ベート・ラウル

B：アイズ・テリオネ・テiona・レフイーヤ・俺

このメンバー…大丈夫だろうかと思つて居ると、フィンが俺を名指しでテリオネに言い含めていた。『君達のメンバーは無鉄砲な部分があるから、ルーメンがいざと言う時は指揮してもらおう。テリオネは通常時の指揮を頼んだよ？』正にフィン至上主義のテリオネには神の神託の様な言葉だったと言える。

フィン達と別れて20分程行つた先、カドモスの泉が見えて来たが、ここまでの道のりは違和感がかかなり有つた。辿り着き周囲を見渡してもそこには灰の山しかなく、強竜カドモス



が何処にも見当たらないのだ。

「これは…カドモスの皮膚、魔石が無いのにドロップアイテムだけが残されているのは不自然だな。ティオネ！早々に泉水を確保次第フィン達の元へ向かうべきだ」

「ええ、そうね…団長の言いつけ通りルーメンの指示に従うわ」

「アイズは周囲に警戒しつつ先頭を進んでくれ、ティオナはレフィーヤを援護してくれ…ティオネはイレギュラーが起こってもパーティーの存続を優先してカバーを徹底してくれ。レフィーヤに関してはここぞと言う時の切り札だ、決して魔力を無駄に消費するなよ？」

「分かった（わ）（はいはい）（りました）」

「泉水の確保が終わりました」

「アイズ：間違っても突っ込んで行くなよ？」

「うん」

「よし、直ぐに「ぎゃああああああ」急いで合流する！」

「今のはラウルの声だったわ！」

「レフィーヤ、泉水は俺が担ぐからひたすら走れ」

俺達は底知れない気持ちの浮遊感を拭えないまま、合流ポイントに疾走し続けた。そろそろと言うポイントに着くと、フィン達が芋虫の様なモンスターに追われているのが見えた。

「こっの！糞虫がー私の団長になにしくさってやがるー!？」

「待て！ティオネー！」

「アイズ！ティオネを止めるからフィンに合流しろ」

俺は光速移動でティオネの暴走する背中を追いかけ、背後から羽交い締めにして何とか止められた。直ぐさまフィンのある場所までティオネを無理矢理連れ戻すと、言い様の無い不安感的中したと言わんばかりに、ラウルの左肩から先の重度の火傷の様な怪我が目に入った。

「すまないねルーメン。ラウルの怪我を見て分かるようにあのモンスターは腐食液を吐き出したり、死亡直前に自爆する事で腐食液を撒き散らすようなんだ」

「ティオネ。先程言っただろパーティーの存続優先だと」

「団長の手を煩わす糞虫が悪いのよ」

「あはは……ラウルの事もあるから早急に野営地へと帰還する。悪いが僕達は武器を腐食液で失っている、アイズとルーメン……芋虫型モンスターの足止めを頼めるかい？ レフィーヤは詠唱を始めてくれ」

俺達は素早く行動に入り、フィン達の撤退を支援しながら芋虫型の殲滅をして行く。アイズは風と不壊属性デュランダルの武器で次々と殲滅し、俺は精霊術と光速打撃にて殲滅する。

《誇り高き戦士よ 森の射手隊よ 押し寄せる略奪者を前に弓を取れ 同法の声に応えよ 矢を番えよ 帯びよ炎 森の灯火撃ち放て 妖精の火矢 雨の如く降りそそぎ蛮族どもを焼き払え》

膨大な魔力を練り上げるレフィーヤに、目の前の俺達を無視して反応する芋虫モンスター、即座に殲滅して行く中でレフィーヤが「放ちます」そう叫ぶと俺とアイズはレフィーヤの元へ向かう。

『ヒュゼレイド・ファラーリカ』

無数の光矢が芋虫モンスターへと降り注ぐ、レフィーヤと言う膨大な魔力の持ち主が故の荒技とも言える。世界最高峰の魔道士と言われるリヴェリアの弟子に相応しい威力だった。

急ぎ野営地へと向かう我々を嘲笑うかの様に響き渡る戦闘音、ロキファミアの野営地付近ではリヴェリアの指揮による防衛陣地が敷かれていた。

「皆の者、もう直ぐだ！フィン達が辿り着くまで何としても家族を守り抜け」

「『うおおおお！』」

俺はフィンに「先に行く」そう言つて光速移動で激戦地へと飛び出した。そこに広がるのは盾を構えて皮膚がただれながら耐える団員と、負傷者を後方へと運び出す負傷者とひたすら武器を戦線へと補給するサポーター達の姿。

最早戦線維持は困難な上に、深層へのトライが絶望的な損害状況が見て取れる、俺が最初に行ったのは全員の光速移動と死守していた地点の崖を破壊する事だった。

崖を登る芋虫モンスター達は崖崩れに巻き込まれて3割を殲滅、それでも数が圧倒的

に多い芋虫モンスターは屍を超えてこちらに向かって次々と新手がやって来る。

「すまないリヴェリア遅くなってしまったて」

「フィン！」

「これより速やかに撤退を開始する！食料に予備武器、回復薬優先で速やかに行動しろ！リヴェリアは詠唱を、ガレスはリヴェリアを守ってくれないか」

「ああ（分かっとする）」

「アイズとルーメンは悪いが殿をお願いしますよ」

「うん（ああ）」

その時だった：

51階層との境付近から巨大な女体型芋虫モンスターが出現した。はつきり言ってる、あんな大きさの芋虫が爆発などしたら、遠征どころか帰還すら危ういそんがいが発生する、

フィンが苦虫を噛み潰す様な顔をして、予備武器の放棄と最低限度の食料と回復薬以外、即座に持てる物のみとして残りを放置と言う号令を皮切りに全員が49階層へと走り出した。

49階層入り口へと辿り着くと、ベート・ローガやティオナが大型女体芋虫を放置するのかと嘯み付いた。フィン自身そんなつもりは無いと、即座に俺とアイズに女体型芋虫だけは殲滅して戻る様に命令する中で、ベート・ティオナ・ティオネ・レフィーヤ：多くの団員が反対意見を述べる。

「これは仲間を見捨てる行為では無い！彼等は確実に達成出来るからこそ命じている。他のメンバーは直ちに腐食液の飛散エリアから撤退しろ」

後ろ髪を引かれる様にこちらに目を向けるメンバー達、ベート・ローガはすれ違いざまに「テメエも死ぬんじゃねえぞ」そう言って先を急いで撤退を開始した。

思わずアイズと目を見合わせてしまったが、アイズは風を纏い俺は光へと自身を変化させる。

「行くぞアイズ：：トドメは君に任せるからな」

「うん：：必ずしとめる」

俺達は巨大女体型芋虫に向かって飛び出した：

## NO. 6

俺とアイズが対峙するのは巨大な女体型芋虫モンスター、攻撃手段が不明な敵だからこそ多少は慎重に攻める。俺自身は一応レベル3だから、敵モンスターを中心に渦を巻く様に光速移動を続けながら斬撃を繰り返し4本生える平たい腕の様なものを切り刻んで行く。アイズは俺の意図を理解したのか、半周遅れで同じ回転方向を周りながら攻撃を繰り返す。

俺達が回り続けたことで周囲の大気も回転し始め、徐々に竜巻状の風の壁ができて行く。暴風によって腐食液を吐き出すと自爆になる為敵は初撃以外は行って来ない。

既に相手は4本の腕を失い、戦闘能力が激減してる上に風使いのアイズと言う相性がこちらに有利な展開だ。アイズにアイコンタクトで仕上げに入る様、互いに回転中心部へと突貫した。

その時だった、女体型芋虫から粒子状のきらめく何かが放出されて周囲に撒き散らした。俺とアイズは危機感から竜巻の中より緊急脱出した瞬間、撒き散らされた粒子が爆発した。

「怪我は無いか？」

「うん」

「あれは、芋虫モンスター<sup>の</sup>成体だったのだろうか」

「分からない、けど…良くない何か」

「ああ、分からないが俺もそう感じた」

50階層での戦闘が終わると、残りのロキファミアと合流後地上への帰還を目指してハイペースで登って行った。

途中で小規模安全地帯内で休憩を挟みながら、18階層にある安全階層セーフティレイボイントと呼ばれる【迷宮の楽園】アンダーリゾートで一泊する予定だったが、失った野営装備の不足を鑑みて少し長めの休憩のみを取り帰還する事になった。

15階層へと差し掛かった一行は、既に中層という事もありロキファミアの二軍が戦闘を受け持っていた。そんな集団の前には、中層では上位に位置するミノタウルスが大量に待ち構えており、フィンの許可でベート・テイオネ・テイオナ・レフイーヤ・アイズも参加して殲滅へとあたった…。



「『『はあ（え）（あ）（ええ）（あ）!?!』』」

「不味い、追え！上層に逃がすな」

「上層に逃げたら死人が出るぞ！すまないがルーメンも頼めるか？」

「ああ。流石に傍観はしない」

「悪いな」

ミノタウルの集団は、半数以上減ると脅威を感じモンスターとは思えない行動に出た。冒険者を前に逃げ出すなど普段では考えられずロキファミリアも面を食らった状態だが、流石に探索ファミリア随一だけあり早急な対応がされた。

もしかしたら、あっただろう未来が変わったのはこの時だったのかも知れない。順序良く狩って行くメンバー達、俺は最後の2体をアイズと探していた。

「うわああああああ」

「行くぞアイズ」

叫び声が聞こえる最中、2体の内1体が目の前の曲がり角を曲がって逃げていた。そちらを指差しアイズに行ってもらおう様に言うと、頷き風魔法を行使して爆風と共に追い

掛けた。

俺の方は叫び声へ向かい、光精靈化して光速移動を行なった…。

目の前には逃げ惑う白髪の小柄な少年の背中が目に入り、俺はそれがヘスティアに紹介したベルだと直ぐに気付いた。

「ベル！右に全力で避けるろ!？」

「ふええ！」

ベルは反射的に俺の言葉に従い、兎も尻尾を巻く素早さでジャンプするのが見えた。

全力抜刀…

光精靈化した状態での全力抜刀は、真空を生み血が巻き散ることもその場で音が聞こえる事も無く、タイムラグが生まれて切られた側の認識と音がやって来る。

ベルは俺を限界まで瞳孔が開いた目で見つめ、状況をいまいち理解する事無くとある台詞を呟いた。

「…英雄」

光精靈化は直ぐに解き、ベルがよく知る俺の姿へと変わった事で現実へと強制的に引き戻された。そんなベルへと差し伸べた手が、直ぐに掴まれたと思つたら、おもちゃ屋にいたる子供の様に目を輝かせて興奮気味に俺に感謝を述べた。

「ルーメンさん!? 凄いです! 精霊に愛された英雄見たいでした」

「あーベル。それはむず痒が、一先ず無事で何よりだ」

「あれって魔法ですか!」

「おい、まだダンジョン内なんだからまた聞かせてやる。一先ず今日はヘステイアの元へ帰って良く寝ろ」

「えっはい!? 本当にありがとうございます!」

「気を付けて帰ろよ」

「はい!」

「アイズ。終わったか?」

「うん…さっきの兎みたいな子は?…知り合い?」

「ああ。純粹で真つ直ぐ『英雄』を目指す…弟の様な奴かな」

「そっか…良い、お兄ちゃんだね」

「そう在れたら良いな」

その後遠征隊は無事地上へと辿り着き、俺個人の報酬は後日受け取る事になり、明日はアテナと一緒にロキファミアリアの宴会への参加予定となった。

それにしても、芋虫モンスターと女体型芋虫モンスターの情報何てギルドに無かった筈だ、かなりの数がある事からあれで全てだと思わない方が良いだろうな。

これ以上、今の情報で思考を巡らすのは余り意味がないだろうから一先ず保留だな。今後も情報収集を出来る手立てを確立しておくべきだろう。

アテナファミアリアのホームへ帰ってからは、遠征に持って行った服の洗濯や武器の手入れの他に、ギルドへの納税用に使った消耗品の数を帳簿に記入などをしてからお風呂に入った。

遠征中の程よい緊張感からの解放からか、その日は割と直ぐに眠りにつくのだった。

翌日の朝は、久し振りに新鮮な野菜を食べたくてシャキシャキサラダと魚の塩焼きを食べるから軽い鍛錬をこなした。普段より軽くしたのも恩恵によるブースト効果は有れど、人間の肉体は常に再生と破壊を繰り返して変化して行く、休養がそこまで必要でない上級冒険者ではあるが、遠征というストレス下で普段より肉体を酷使しているだろうと言う事から今日は軽くした。

今日の鍛錬中に科学的進歩がかなり進んだ世界出身故なのか、武器への光を俺の力で操れないかを思いついてしまった。光の屈折に干渉して敵対者に認識をさせない攻撃が出来るのではないかと思った。

その結果、ロキファミアとの集合時間が13時だったのだが12時45分まで試行錯誤していた。武器の位置関係を誤魔化す事には成功したが、不可視の状態にするのはかなり難しい様なのだ。

ロキファミアのメンバーと合流して、俺は自身の取り分に含まれる単独撃破されたモンスターの魔石やドロップ、採取品や討伐補助したモンスターの人数分の1を受け取る予定だ。

因みに遠征参加と言う、別枠で300万ヴァリスは既に神ロキからアテナに手渡されている。それに深層域で俺は採取品に含まれる『カドモスの皮膜』があるので、今後はもっとアテナに好きな事をさせられるという期待があった…。

## NO. 7

遠征後、ロキファミアリア主催で開かれた宴会の席で起きた事だった、お酒が入った団員達の気が大きくなるのは多少は理解出来る……。だがしかし、我々の失態であのような状況が出来上がったのは事実だ、それを酔っていたからと許される事ではない。

「ルーメン！ テメエもあん時の話をみなに聞かせてやれえ……15階層で逃げ出した糞牛共の話を」

「数体取り逃がし、危うく怪物贈呈パスパレードで悪質なモンスターキルするところだった話か？」

「あれは我々の失態だ、決して酒の肴にする話などでは無い」

「流石、エルフ様は高潔だこつてえ……結局はダンジョンは自己責任だったのによおー弱ええならダンジョンなんか潜らなきや良いんだが」

「ならベートは今後ダンジョンへの進入は禁止になるな？」

「はああ！ 何で俺がダンジョンに行くのが駄目なんだ？ あの白い兎野郎と違って俺は強ええ！ アイズもそう思うだろう」

「うん。5階層を探索する冒険者には……10階層もしたのモンスターは自殺行為だと

思う…」

「そうだな。ベートが68階層単独で徘徊するのと同じ事だな…それが基準で考えるならベートは雑魚と言う事になる。吐いた唾は戻せないと言うなら、ベートは今後ダンジョン探索が出来ないどころか、ロキファミリアは解散する事になるな」

「チツ！胸糞悪い」

「お前が言える立場に無い！酔っていたからと言って許されん」

「うるせえ！糞ババア」

ベートが悪態について豊饒の女主人を後にしたが、一瞬だがベルらしき後ろ姿がベートを追い掛けて行ったのが見えた。ベルは先程の悪態を聞いても耐えたのだろうか、何故そんな事を言うベートを追い掛けたのかは俺には分からない…

ロキファミリアの宴はベートの発言で微妙な空気が流れ、俺は皆と離れたカウンターに移って飲み直す事にした。

その頃、ダンジョン入り口付近でベートを見つけたベルは大声で彼を呼び止めた。その発信源を訝しみながら睨みつけるベート、そこには先程まで自分が蔑んでいた白兔の少年がいた…。

「テメエはあん時の」

「僕は…弱い、です。何もしてこなかった僕に…何かを得ようとする事自体が烏滸がましいのかも知れませんが！でも、それでも僕はもう何かを失うのを見ているだけではない…必ず貴方を超え、僕は誰かを守る英雄になります」

ベルはそう言うと、ベートを追い越してダンジョンへと潜って行ったのだった。ベートが彼に見たモノが何だったのかは、ベート本人にしか分からないのかも知れない。

「俺は……自己嫌悪してただけだったんじゃないか……」

その言葉は夜の空気へと消えて行った、ベート・ローガの過去を知り彼の本質を知る者にはか理解出来ないだろう独り言を残し、彼もまたダンジョンへと潜って行ったのだった…。

宴の日から既に1週間が経過していたある日、カドモスの皮膜を何故かティオネの団



長への良いとこアピールとして言われた『ルーメンの取引を補助してあげてくれないかい？君が「1番」頼もしいからね』と言う言葉が彼女の猛獣スイッチを押し下しく、1200万と言う皮膜の買取相場限界値でディアンケヒトファミリアが買い取つてくれた。

その元手を利用して、アテナ自身がやりたがっていた『戦略・知略・芸術』の女神らしいクラシック音楽喫茶をする事になった。戦略も知略も情報が一番大事だからこそ、情報収集が楽な飲食関係であり芸術を複合したクラシック音楽なのだ…。

店舗は、元宿泊施設だった冒険者通りにある400万で購入し大型改装が必要な店舗だった。従業員は厨房用に2名とヘスティア、更には剣神タケミカツチと言うかなりVIPなメンバーなのだ。

因みにジャガ丸くんは当店の目の前に移転して、ヘスティアが兼業バイトを行うと言う正にバイト戦士の鑑であるヘスティア…。メニューについては俺の前世では普通に存在した物を多く取り入れ、店名に至っては『パラディウム』と名づける事となった。

『己を律する者を理性的と言う、己の想いを貫く者を理想主義と言う……。己を律し想いを貫き通し叶えた者を皆は英雄と呼ぶ』

俺が成りたいのは英雄などでは無い、あの時こうしていれば良かったと後悔したくない臆病者なだけだ。あれから何度もベルと話をして来たが、ベルは純粹培養の俺を思い出してしまう。

俺が成れるのが英傑ならば、ベルが成れるのは英雄だろうと彼を見てると思ってしまう。純粹さを失った幼少期、知性的で現実主義な俺では夢を見るより努力を行って来た。

現在地は27階層のアンフィス・バエナの目前、水中戦では普通の冒険者は決して戦わない、俺のランクアップが通常レベルでは叶わないからと水中戦を挑んでいる。

殆どの冒険者は水泳などを経験した事が無いが、俺には前世があり物理の学が存在する為それらを可能とした。それでも光精霊の力が水中では半減してしまい、アンフィ

ス・バエナは5割り増しで強敵へとかしてしまふ。

尾を水中で避け、噛み付く双頭を避けながら水圧無視の突き攻撃を繰り返す。水中では水圧の関係から斬撃はほぼほぼ無意味な為、突きでのみ敵にダメージを与える。

トビウオの様に定期的に呼吸に上がり、その都一度でも当たれば死にそうな攻撃を躲す、上流を必ず意識してアンフィス・バエナへの水圧を俺より上に維持をする。

2時間：

これがアンフィス・バエナとの戦闘時間であったが、海水浴に行った事のある日本人からすると、歩く事も出来ない疲れであつても不思議では無い、だが冒険者と呼ばれる恩恵持ちには人類の体力を凌駕する新生物だと言つて過言では無い体力がある。

充分に休憩を挟んでから、人魚の生き血をゴブニュファミア製の銛で人魚を射止め採取して行く。水中戦が可能なら俺だからこそ希少価値の高い人魚の生き血を大量に集められる：

今回ココに来たのは、ヘスティアから紹介されたミアハファミアの極貧派閥を救い、専属医療ファミリアを確立させて持ちつ持たれつを可能にするためだった。

先日は、7階層で出現する希少種ブルー・パピリオンからドロップする羽根を採取し

まくり、郊外にあるセオロ密林にてブラックライノスの卵を回収した：

【デュアルボーション二属性回復薬】1，000本分

ブラックライノスの卵

ブルー・パピリオンの羽根

※1本7万5千ヴァリス

【デュアルハイボーション二属性高回復薬】20本分

ブラックライノスの卵

ブルー・パピリオンの羽根

カドモスの泉水

※1本15万ヴァリス

※高回復薬3万5千ヴァリス

※魔力高回復薬10万ヴァリス

【エリクサ万能薬】50本分

カドモスの泉水

人魚の生き血

※1本50万ヴァリス

因みに【デュアルハイボーション二属性高回復薬】は、高科学水準の発想で生まれたもので、遠心分離機・蒸留機・濾過機・顕微鏡など多くの知識を神ミアハの名で盟約として貸し与えている。

彼等の財政状況ではとても賄えない設備をアテナと共に提供し、ヘファイストスのツテで店舗を一部賃貸させて貰いオープンさせた。店舗そのものには一般人を従業員として雇い、ナアーザとミアハを完全薬師兼医療従事者として労働して貰う事になった。

オープンの初日には、デイアンケヒトが技術を売れなどと脅迫して来たが、ロキファミリアの利用店舗を完全にミアハに切り替えさせるとアテナが脅し（そんな権限をアテナは持って無い）盟約が後ろ盾となつて充分な脅しとなった。

ミアハ曰く、デイアンケヒトへの借金は総額3億2000万ヴァリスだったらしいが、既に1億5000万ヴァリスを切っているとか…。ナアーザには本気で感謝され、たまに『ルーメン…うん。ミアハ様が』などと言っていたとか言わないとか。

アテナファミリアは商業ファミリアとは言えないが、医療・飲食・探索ファミリアを盟約と言う形で括り、多くのファミリアへの影響がある事から（アテナが怖い）多くの派閥が弱小強者などと言う呼び方でアテナファミリアを呼びはじめていた。

ルーメンは今日も、アイズと一緒にダンジョンへ行こうと準備をしていたのだが、急

に神ロキと一緒にアイズがアテナファミリアへとやって来た。

「お〜い！アテナ〜ルーメン〜ン！」

「どうしたの？ロキ：アイズちゃんと一緒に来る何て珍しいわね」

「アテナ様。ルーメン、おはよう」

「ええ。おはようアイズちゃん」「ああ、おはようアイズ」

「それと（神）ロキ」

「なんかウチの扱い酷ない？」

「普通よ（ですよ）」

「ファミリアでも、同じ」

「アイズたんまで〜ああ、そやった：今日は怪物祭モンスターファイリアやん？アイズたんが出掛けよう  
思ってたんやけど、ルーメンに伝えて無いからアイズたんが無理やと言うんや！：ん  
で、それならいつそのことアテナとルーメンも一緒に行かへん？フレリアにも用がある  
んやけど、アテナがおった方が何かと都合がええやん？」

「私も、一緒が良い」

「アテナが決めてくれて構わない」

「う〜ん、そうね。良いわよ：フレリアにも久しぶりに会えるのね」

「ほんなら！早速行くで〜」

「ロキ。準備が必要よ」

「そうだな」

「…」

「そつそつやな」

それから我々が向かったのは、小洒落たカフェの二階にあるテラス席だったのだが、其処からは圧倒的な強者の威圧と強烈な魅了を匂わせる神の気配があった。

強者からは速さを含む逃げる事だけは出来るが、相手を傷つける事は出来ないと悟り、無駄に波風を立てない様にアテナの後ろで控える事にした。

「待たせてすまんかったなあ？フレイヤ」

「いいえ、構わないわ。そのお陰で素敵な子に会えるのだから」

「フレイヤ久しぶりね」

「ええ。アテナに今日会える何て思ってたわ」

「私もよ」